

創造的学習の成立条件 — 「非決定空間」に着目して—

宮 崎 隆 志*

目 次

1. 創造的学習とは	1
2. 創造とは何か	2
(1) 創造性の定義	2
(2) 創造の過程	2
3. 地域づくり型解放運動における創造的学習の展開	3
4. 狭義の創造性の成立条件—まとめにかえて	5
(1) ダブルバインドへの逢着	6
(2) 場の二重性	6
(3) 外部コミュニティとの矛盾の解決	6
参考文献	7

1. 創造的学習とは

学習は種々の変化を引き起こす要因であるが、「新しいもの」を産出する変化が創造であるとすれば、それに対応する学習を創造的学習と呼ぶことができる。この学習は、対象と道具が所与とされた活動における道具操作の習熟をもたらす操作的学習や、所与の対象（課題）に対する道具や方法の選択や工夫をもたらす探究的学習と対比すれば、さしあたり対象（＝目的）そのものを転換し設定する学習といってもよいであろう。対象の転換は活動の質的転換を意味し、旧来の活動によって構成されていた状況も変革されることになるからである(エンゲストローム 1987=1999)。このような学習は地域づくりに関わる社会教育実践の核心に位置づけられるべきものであろう。

では、この創造的学習が成り立つ条件は何か？この発表では創造過程を特徴づける諸条件を先行研究に基づき整理し、地域づくり型解放運動の事例を参照しつつ、創造的学習の過程と展開論理を検討することを課題とする。

*北海道大学教育学研究院・教授

2. 創造とは何か

(1) 創造性の定義

最初に創造性に関わる概念整理を簡単に行っておきたい。というのは先に述べた暫定的定義は創造性研究における一般的定義とは異なるからである。すなわち創造性研究では、何らかの意味で「新しいもの」の産出に焦点が合わせられるが、その主たる関心は創造の原動力やメカニズムに向けられている。例えば、個人主義的アプローチに基づく場合は、創造性は「世界に表出された新たな心理的組み合わせ」と定義され、既存の概念を組み合わせる個人の心理的機能が分析される。社会文化的アプローチの場合は、創造性は「ふさわしい見識のある社会集団によって、新しいものとして、また適切で有用であり価値があるものとして判定される成果の産出」として定義され、新たな成果を生み出す集団の機能が分析される (Sawyer 2012)。前者は子どもの発達や日常生活の中での創意工夫にも創造性を見出し、後者は新製品の開発などのイノベーションや科学の発展過程などに創造性を見出す。これらは、創造性を切り取る場面に違いはあるものの、「従来なかったもの」として新しいものを理解し、その産出を創造性とする点では共通している。このような理解を広義の創造性と呼んでおきたい。

それに対し、先の暫定的定義では、創造性研究で扱われる創意工夫やイノベーションは方法や道具の改善をもたらす探求的学習の結果として理解し、創造的学習からは区別している。というのは、イノベーションでは目的は所与であり、変化していないからである。目的は活動の文脈を構成する起点であるが、その点からすれば、イノベーションは文脈を直ちに変更するものではない（但し、長期的には変更につながる場合もある）。方法は従来と異なったとしても、文脈が変わらなければ、産出されたものは従来の目的をより合理的・効率的に達成するための既存の方法の変形物（バリエーション）と言える。それに対し、ここでいう創造は、文脈を転換し変革することによる新しいものの生成を意味しており、質的な不連続性に力点を置いている。この意味での創造をもたらす機能的特性を狭義の創造性としておきたい。

(2) 創造の過程

但し、今述べたような狭義の創造性は広義の創造性をやはり基盤としている。言い換えれば創造的学習は探求的学習を基盤としている。広義の創造性論は、一般化すると、二つの異質な概念の出会いを創造の必要条件とみていいと言っておくであろう。ヴィゴツキーは創造の過程は不適応を出発点すると述べたが、不適応は異質なものの等置により生ずるからこれも同義である。

そこで異質な概念の等置を $A=B$ として単純化すると、それが創造につながる場合はレトリック形式 $A=\text{非}A$ （あるいは $A=B \cdot A=C$ ）をとることになる。例えば、「彼はサソリである」という隠喩表現では、字義通りに解釈すれば、人間である彼と昆虫であるサソリは異質であることは明白であ

るが、それが等置されると、異質なものとして排除しあう両極を統一する何かを想像することが必要になる。創造性研究では、この想像による統一の諸形式を分類しているが（ソーヤー2007）、今回はその一つの形式に関わるレトリック論を参照して、ここで提示されている問題を敷衍しておきたい。

「 $A=B$ 」形式の文は、 A および B に関わる「背景的知识」（サール 1979）や「通念の体系」（ブラック 1954）を前提にして成り立っている。先の例であれば、彼は人間であり、ある個性を持つ人物であることが関係する発話者と聴き手の間で了解されているし、サソリについても同様である。したがって、 A と B が等置されるということは、 $A \cdot B$ が前提としている解釈の枠組みが類似性（サール 1979）を持つことを意味する。逆に異質であるという判断は、 $A \cdot B$ の背後にある枠組みの差異が大きく排他的であることを意味する。レトリックは、読み手の側に生じるこのジレンマ体験、つまり類似的であり同時に排他的であるという矛盾とその解決への能動性によって成り立っている。

広義の創造性研究では、創造の条件の一つとして多様性が保障されたコラボレーションが挙げられているが（Sawyer 2012）、それはこのようなレトリカルな状況が実践の中で発生することに着目するためと考えてよい。また、チクセントミハイは意図性が忘却される「フロー状態」を創造の条件として挙げているが（1975=2000）、それは $A \cdot B$ が前提とする解釈枠組みがそのままでは通用しなくなり、かつジレンマの解決が可能な状態を意味していると言えるであろう。

この広義の創造性は、客観的には字句の本義的意味の背後にある文脈性の次元に遡り得るジレンマ経験に着目しており、この遡及性は文脈の変革に着目する狭義の創造性を形成するための出発点になる。しかし、レトリカルな状況におけるジレンマ体験は、レトリックがそもそも話者や作者の意図した表現形式であり、特定の文脈を想起させるためのツールであることに示されるように、対立する二項の与えられ方によって想像の範囲は限定されている。行きつく先が予め定められた想像は、狭義の創造性の必要条件としては不十分である。

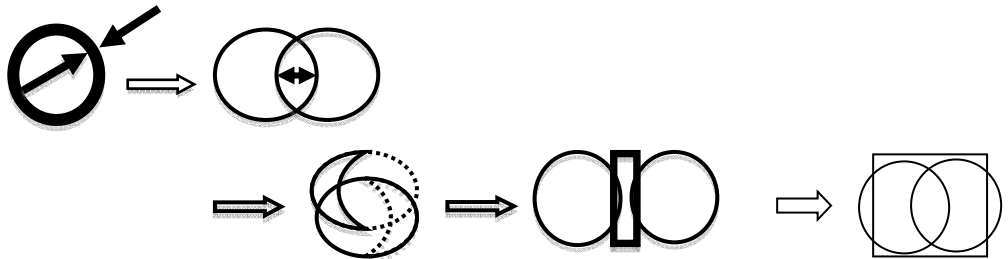
それでは、狭義の創造性の条件はどのようなものであろうか。ここで、実践事例に即して検討課題を仮説的に抽出することを試みたい。

3. 地域づくり型解放運動における創造的学習の展開

とり上げるのは大阪の北芝と呼ばれる被差別部落の実践である。当初は同和对策事業の獲得を目指す運動を展開したものの、その限界を意識することによって事業を返上し、独自に地域づくり型の解放運動を創出した。この運動は、解放運動の目的自体を拡張し、質的に転換させており、また創造性を持続させ、地域社会を変革する仕組みを創りだしたと言う点から見ても、狭義の創造性の条件を探る上で適当な事例と思われる。

紙面の都合から対象事例の詳細（宮崎 2012）は一切省き、実践の論理のみを確認する。次の図は

リーダーの一人である井上勉氏がこの過程を説明するために示して下さったものに私が一部加筆したものである。



左側の矢印二つが向き合っている図は、外圧に対抗するために内部で団結し、コミュニティを閉鎖したことを示している。差別問題で傷つけられれば、防衛対応として外部の他者を踏みこませないためのある種の壁を作ってしまう。しかし、コミュニティを閉鎖してもそのままでは貧困と差別は解消されないために、「知ってもらおう」という活動、つまり誤解、偏見をなくしていく啓発活動、および権利保障としての対策事業の要請が必要になる。そこで同和教育によって上段右側の図のようにコミュニティとコミュニティを結びつけることが試みられた。その結果、「差別は良くない」ということは多くの人を知るようになったものの、部落問題がタブー視されると、お互いの理解が深まるどころか逆に対立が生じた。同和教育によって両者が接近し、二つのコミュニティが重なる部分は確かにできてものの、その中でお互いに緊張状態のままに対峙することになった。一見するとお互いに理解し合ったかのようなこの状況は、例えばバブル経済が崩壊したような全般的な困難の下では、「あの人たちが方が手厚く保護してもらっている」という示されるように、潜在化していた対立を顕在化させることになる。また、特別な対策を受けていたものの、地域の子どもの学力のみならず自己肯定感は低いままであった。ここから対策の必要性を訴えるために貧困を強調することにより貧困を再生産するというジレンマが意識されるに至った。

この矛盾の自覚化によって部落コミュニティの側は、同和教育を受ける存在から、自分たちが解決の主体に転換することによって、自分たちの境界を開くという戦略を立てた。個人給付の返上はその嚆矢であるが、その延長線上で、それまでの運動によって勝ち取ってきた保育所も隣保館も、市民の誰もが使える公共施設として開放された。図の中の三日月のような形はこの開放性を意味している。

ところが、外部の人々からすれば、この対応によって無料で使える施設が増えたことになり、多くの人々が利用者として地域に出入りするようにはなったものの、それでお互いの理解が直ちに深まることはなく、一方が開いても他方は開かないという不等価な状況は変わっていなかった。

そこで、図表の右下にあるように両者をつなぐ仕掛けの必要性が意識され、二つのコミュニティ

の間に「中間地帯」・「緩衝地帯」を作ることが試みられた。1995年のワークショップがその原型であり、2001年のNPO法人「暮らしづくりネットワーク北芝」がこれにあたる。井上氏によれば、この「中間地帯」は、二つのコミュニティの間を自由に出入りできる装置であり、「壁が見えない地帯」であるという。つまりこのNPOが創り出す空間は交差点であり広場であり、どの方向にでも行け、参加することも、降りることもできる。部落の側からすれば自尊心を回復し、自信を持つエンパワメントの場であり、外側の人たちも関心をもつことができる。多様な人々が自然に入り混じることによって、ぶつかり合い（「摩擦」—井上）も生じるが、それが互いに開いていくための契機となるという位置づけである。そして現在では、この「中間地帯」を地域社会全体に広げることが課題とされ、人間解放としての地域づくりが目的として位置づけられるに至っている。

この実践における転換の最初の契機は、排除性に無自覚な主流社会への批判に加えて、運動（主体）の側に浸透した矛盾の意識化であった。解放を意図した実践が貧困という予期せぬ結果を産み出すことへの気づきは、批判が自己に及ぶことによって自己の正当性さえもが揺らぐというダブルバインドへの逢着を意味している。広義の創造性論におけるジレンマ状況への対処に対比すると、異質な文脈性を統合し意味を想像する自己・主体の正当性さえもが揺らぐ事態というべきであろう。

第二の契機は、ワークショップ形式による集団的な問題解決過程における学びの経験であった。これはコミュニティの境界に位置する道路という公共空間の整備に関わるワークショップであったが、多様な参加者が生活文脈をそのまま持ち込みつつ、未確定の目標を集団的に明確化する実践であり、その過程で相互が摩擦を起こすことによって、意味を協働で創造する経験として総括された。これが中間地帯の創設という運動方針を創出する際のモデルとなった。

第三の契機は、NPOが創出した中間地帯における自由な協働に基づく場の意味の生成の経験である。新たな協働活動において多様なアクターが会うことにより、摩擦が生じ、レトリカルな状況が不断に生じるようになるが、ここでの異質性の等置は、特定の作者の意図によりなされたものではない。例えば、多様な活動が展開する拠点としての広場の一角に設けられたコミュニティレストランは、料理や交流に関心を持つ若者たちによって運営されたが、その場でコミュニティレストランという活動を行うことの意味が不断に問い返されたという。地域づくり・解放運動・レストラン・自分の生き方といった諸要素の相互関連を整理し、文脈化することを通して、NPO活動やそれを通して生成する場の意味が問い直されている。広義の創造性が個々のアクターにおいて不断に発揮され、また個々のアクターの創造性が場の定義をめぐる緩やかに組織されることによって、新たな活動の目的が実践的に再定義され、明確化すると行ってよいであろう。

4. 狭義の創造性の成立条件—まとめにかえて

以上の事例から、狭義の創造性を高める創造的学習の成立条件として以下の諸点が指摘できる。

(1) ダブルバインドへの逢着

異質な概念が等置されるジレンマ経験を起点としながらも、そこからさらに、ジレンマを解決する主体の正当性が批判にさらされる経験、すなわち批判の自己言及的経験(ベイトソン 1979=2001)としてのダブルバインド経験へと経験が深化することが必要である。批判する主体が批判対象と同一の論理を自らに見出した時に、自明であったはずの目的は一旦、保留されることになる。主体の側でも自らに与えられていると確信していた正当性が揺らぐために、動機や批判の正当性を再度、より深く根柢づけることが避けられなくなる。同時に、主体は分散的な形態に変化するであろう。それは特権的主体を頂点とする垂直的秩序を支えた規範が崩壊するからであり、またそれにより協働が水平的秩序の下で進展するからである。こうして出現する空間が非決定空間(宮崎 2012)である。それは単に多様性を称揚するだけの、作為的で逆に統制的であさえある場ではない。ヴィゴツキーが指摘した想像の再構成は、こうした客観的状況の変化によりはじめて可能になると考えるべきであろう。

(2) 場の二重性

このように非決定空間はダブルバインドとしての矛盾によって生じるが、それはダブルバインドの経過的解決形態としての有効性に支えられている。この関連に着目すれば、非決定空間はダブルバインドによって意味づけられた空間である。北芝の場合は、この空間が中間地帯として具体的に構想され(芝楽と名付けられた広場)、「出会い・つながり・元気」のスローガンが示すように多様なアクターが出会い、協働によってつながっているのであるが、先に見たように、この協働の展開の中で、場の意味が作り上げられている。

したがって、場としての非決定空間は一方では根源的な矛盾によって意味づけられ、他方では日常生活の中の多様な動機に基づく協働とそこで発揮される広義の創造性によって再帰的に意味づけられるという二重性をもつ。この立体構造の故に、個々のアクターによる自分たちの活動の集団的意味づけは、その活動の基盤にある非決定空間を正当化する論理との対話を避けることができない。時間はかかるが、この対話過程をとおして、ダブルバインドにおいて一旦保留された目的が再度、明確な社会的意味を持つものとして措定されてくるはずである。このようにみれば、この立体構造を拡大再生産することが、狭義の創造の実際的な進展過程であろう。

(3) 外部コミュニティとの矛盾の解決

北芝には市役所や学校、町内会、国際交流協会などの多様な団体に関わり、協働している。これらを制度的に規定されたテーマを実現する活動により生じるコミュニティと言う意味で制度化コミュニティと呼ぶなら(宮崎 2011)、それらはコミュニティ内外の秩序を制度によって維持する傾向が強くならざるを得ない。それは非決定空間や分散的な集団的主体を正当化することにより成り

立つ北芝の秩序とは対立する。狭義の創造性を実際に展開するためには、このような制度化コミュニティとの間に生ずる矛盾を解決することが不可欠であり、創造的学習はその領域を射程に収める必要がある。

制度化コミュニティ内でのダブルバインドの意識化が生じた場合には、当該制度化コミュニティは北芝との連携・協働に問題解決の可能性を見出し、自らの制約を超えることができると評価していた。この点の更なる検討は今後の課題であるが、非決定空間を媒介にした新たな社会的目標の定立は、このようなコミュニティ間の対立の解決と協働によって、より現実的なものとなるであろう。

<参考文献>

- G.ベイトソン (1979=2001) 『精神と自然』 新思索社
マックス・ブラック (1954) 「隠喩」,佐々木健一編 (1986) 『創造のレトリック』 勁草書房 所収
M.チクセントミハイ (1975=2000) 『楽しみの社会学』 新思索社
Y.エンゲストローム (1987=1999) 『拡張による学習』
宮崎隆志 (2011) 「「ボーダーレス」下における学校の限界線の拡張可能性」 『教育学研究』 78 (2)
宮崎隆志 (2012) 「コミュニティ・エンパワメントの論理」 『臨床教育研究』 第一号
Keith Sawyer(2012) *Explaining Creativity*, OXFORD
K.ソーヤー(2007=2009) 『凡才の集団は孤高の天才に勝る』 ダイヤモンド社
ジョン・R・サール (1979) 「隠喩」,佐々木健一編 (1986) 『創造のレトリック』 勁草書房 所収
ヴィゴツキー 『子どもの想像力と創造』 新読書社